みつまたの道植物ガイドブック

TAKASHI WATANABE
ERIKA HIROOKA
YUKA MUKAI
RYOSUKE MURAI

協力：かみこや　２０１１年制作

Memo - フィールド学習帳 -

MAP- みつまたの道 -

1:「みつまたの道」マップ
2: 目次 - 収載植物リスト -
3: はじめに
4:「みつまたの道」の植物ガイド

■ 収載植物リスト

01: アカネ
02: アリノトウグサ
03: イヌガヤ
04: イヌタデ
05: イヌトウバナ
06: ウツボグサ
07: ウワバミソウ
08: エイザンスミレ
09: オトコエシ
10: カラスノゴマ
11: キッコウハグマ
12: キヅタ
13: ギョウジャアザミ
14: ギンバイソウ
15: ヤマアジサイ
16: クサヤツデ
17: コクサギ
18: シシガシラ
19: ジャノヒゲ
20: ジュウモンジシダ
21: シ ウジョウバカマ
22: シラキ
23: スイカズラ
24: スギ
25: スズシロソウ
26: センブリ
27: タケニグサ
28: ツルシキミ
29: ツルリンドウ
30: ニリンソウ
31: ノキシノブ
32: ノコンギク
33: ハガクレツリフネ
34: ハリガネワラビ
35: ヒナノウスツボ
36: フタバアオイ
37: ホソバガンクビソウ
38: ホソバトウゲシバ
39: ホソバノヤマハハコ
40 マルバコンロンソウ
41: ミズマタソウ
42: ミツマタ
43: ミヤマタニソバ
44: ヤマフジ
45: モミジカラスウリ
46: ヤクシソウ
47: ヤマブキ

Contents - 収載植物リスト -

ヤマフジ ***Wisteria brachybotrys*** **Siebold et Zucc.**

山地に生えるフジのこと。フジは吹き散るの意味といわれるが定かでない。花はフジに比べて濃い紫色で、白色のものもあり、全体的に花の房が短い。ツルを握ると、親指が左下から右上に向かう。

モミジカラスウリ ***Trichosanthes multiloba*** **Miq.**

カラスウリの一種で、葉がモミジのように深く裂ける。6～ 8 月、縁が短くレース状に裂けた白い花を咲かせる。カラスウリと同じように夜に咲くが、日中も開いている。果実は 10 ㎝ほどの球形で、秋に黄色く熟す。本州（近畿、中国）、四国、九州に分布し、山地や人里近くの林内や林縁に生える。

ヤクシソウ ***Crepidiastrum denticulatum*** **(Houtt.) J.H.Pak et Kawano**

病気や災難を除く薬師如来の草という意味で、葉の形が如来の光背に似ていることから。茎は直立して、高さ 40～ 100 ㎝になる。茎や葉を傷つけると白い乳液を出す。荒れた土地でも大きく育つので、タンポポのような黄色の花がよく目立つ。食べると独特の苦味がある。

ヤマブキ ***Kerria japonica*** **(L.) DC.**

細くしなやかな枝が風に揺れる様から。古名は山振。花色を小判に例えることがある。一重と八重のものがあり、江戸城を築城した武将・太田道灌が雨宿りに寄った家で蓑を借りようと頼んだ際に、家の娘がヤマブキを手渡し、実がならないことに例えて断ったという話がある。

マルバコンロンソウ ***Cardamine tanakae* Franch. et Sav. ex Maxim.**

葉が丸いコンロンソウのこと。コンロンソウは、白い雪が降り積もっている中国の崑崙山に由来する。4 ～ 5 月、総状花序に白色の十字形の花をつける。高さ 7 ～ 20cm で、這うようにして生育する。山地の木陰、湿った林内、沢の縁などのやや湿った場所に多い。

ミズタマソウ ***Circaea mollis* Siebold et Zucc.**

果実に生えているカギ状の毛が、露がかかった水玉のように見えることから。8 ～ 9 月、茎先や上部の葉腋から花序をだし、白～淡紅色の小さな花を密につける。カギ状に曲がった白い毛は衣服や動物にくっつき、運ばれる。山地の林内や林縁の日陰になる場所によく生える。

ミツマタ ***Edgeworthia chrysantha* Lindl.**

枝が三つに分かれる特徴から。3 ～ 4 月に球状に集まった黄色や橙色の花が下向きに咲く。中国中西部からヒマラヤ原産。古くから日本に導入され、江戸時代から製紙に使われるようになり、各地で山村の貴重な換金作物として栽培されていたが、野化しているものもある。

ミヤマタニソバ ***Persicaria debilis* (Meisn.) H.Gross ex W.T.Lee**

山深い谷間に自生し、ソバ (蕎麦) に葉が似ていることから。茎は地面を這いながら斜めに立ち上がり、節には逆向きの棘がある。葉は薄く柔らかい三角形で、八の字形の黒い紋様がある。標高の高い山地の日陰、沢沿いなど、水分の多い場所に生育する。

ntroduction- はじめに -

高岡郡梼原町は、高知県北西部に位置し、愛媛県との県境にあり、周囲が 1,000 メートル級の山々に囲まれています。町の総面積の 91%は森林で、人口約 4,000 人の静かな山里は、別名「雲の上の町」とも呼ばれています。江戸時代から国境の交通の要所、紙の原料であるコウゾやミツマタの交易の場としてとして栄え、坂本龍馬脱藩の道や通行人をもてなした茶堂、かの司馬遼太郎が著書の中で絶賛した棚田や最後の清流として知られる四万十川の源流をはぐくむ山並、ススキやササの草原や牛の放牧の合間に白い石灰岩がのぞく四国カルストなど、歴史や文化、自然を楽しむことが出来る町でもあります。

町の中心部から北にある太田戸地区は、姫鶴平・五段高原・天狗高原・大野ヶ原などから構成され、標高 1000 ～ 1455m の石灰岩の高原地域である四国カルストの南麓にあります。県境に程近い山間の地に、18 年前の 1993 年に海外から日本の伝統文化を学ぶためにオランダから来日し、手漉き和紙工芸家として活躍するロギール・アウテンボーガルト氏が暮らしています。同氏は、梼原町の自然に魅せられ、2006 年には紙漉き体験民宿「かみこや」をオープンし、太田戸地区の住民とともに「やなぎばた会議」を発足し、和紙の原料であるコウゾ、ミツマタの生産加工を一貫して行い、自然と共に暮らす山の人々の生活を再現する文化活動を行っています。

因みに太田戸地区の現在の人口は 50 名ほどで、そのほとんどが高齢者です。かつては山を越えて和紙や炭の交易を行っており、牛舎の敷き草をカルスト地帯の茅場から運んだり、植林の伐採のために人が行き来するなど、山の暮らしに密接した道がありました。

私たちは、高知県内のこうした歴史のある文化道の再生のために、昔の人々が行き来した形跡を辿りながら、自然環境や沿道に生える植物を観察することで、地域振興ための観光ツールとして活用できないかと思い、本冊子に調査した植物をまとめました。

地球には 30 万種以上の植物群がありそのうち、日本にあるのは 5、6,000 種、高知は植物資源の豊富な土地で、3,000 種以上が群生しています。太田戸で見られるすべての植物を網羅することはできませんが、本冊子を片手に、少しでも登山道の傍らに咲く花や、豊かな環境を作り出す植物に、興味を持っていただければとの思いで本書を企画しました。

Guide Book- みつまたの道の植物 -

47
Plant

アカネ ***Rubia argyi*** **(H.Lév. et Vaniot) H.Hara ex Lauener**

根が赤黄色をしていることから、「赤い根」から。茎は四角形で、下向きの棘をひっかけながら生長する。葉は 4 枚ずつ節から輪生しているようにみえるが、2 枚ずつが対生している。赤色の染料に使われた。根を乾燥させたものを、生薬・茜草根（せいそうこん）として、解熱、利尿、止血などに用いられた。本州から九州に分布。道ばたや林縁などに自生する。

アリノトウグサ ***Haloragis micrantha*** **(Thunb.) R.Br.**

植物全体の姿をアリ塚､細かい花をアリに例えた。葉は対生するが、上部の葉は互生することがある。7 ～ 9 月に、茎の先に赤褐色の小さな花を点々とつける。寒風があたる場所のものは紅葉していることが多い。北海道から南西諸島、東南アジアなどの温帯～熱帯に広く分布。山野の日当たりのよい湿地、草地、畦などに生育する。

イヌガヤ ***Cephalotaxus harringtonia*** **(Knight ex Forbes) K.Koch**

カヤに似ているが、悪臭と苦味があり食用にはならないため、役に立たないという意味でイヌとあらわす。灯火用油としては、イヌガヤのほうがカヤにまさる。葉は細長い線形で、先は短く尖るが、触れても痛くない。果実は前年枝の先端にでき、翌年 10 月に熟すと褐紫色になる。本州（岩手県以南）から九州（屋久島）に分布。

フタバアオイ ***Asarum caulescens*** **Maxim.**

カンアオイに似ていて、茎の先端に葉を 1 枚対生することから。根茎は長く延びて地上を這い、群生する。3 ～ 5 月、葉柄の付け根から細長い花柄を伸ばして、淡紅色～紫褐色の花を 1 個つける。徳川家の紋所の「葵の御紋」はこの葉を表したもの。

ホソバガンクビソウ ***Carpesium divaricatum*** **Siebold et Zucc. var.** ***abrotanoides*** **(Matsum. et Koidz.) H.Koyama**

花がつく様が、煙管（キセル）の雁首（ガンクビ）に似ており、葉が細いことから。ガンクビソウの変種で、よく分枝した葉の付け根から花茎がのび、径 5 ～ 6 ㎜の舌状花がない径 1 ㎝程の黄色い筒状花を咲かせる。山地の日陰に多く生育する。

ホソバトウゲシバ ***Huperzia serrata*** **(Thunb.) Trevis. var.** ***serrata***

峠付近で見かける小さな草から､トウゲシバ（峠芝）の名になった。冬でも枯れず、地際に輪生するように葉がついている姿が目立つ。9 ～ 11 月、茎上部に黄白色の二枚貝のような胞子嚢を多数つける。近年有効成分があることが分かり、健康食品の原料として注目されている。

ホソバノヤマハハコ ***Anaphalis margaritacea (L.)*** **Benth. et Hook.f. var.** ***angustifolia*** **(Franch. et Sav.) Hayata**

葉が細く、山に生育するハハコグサの意味。葉は線形で幅が 2 ～ 6 ㎜と細く、裏面は綿毛が密生するため白い。8 ～ 9 月に白色～淡黄色の花をつけるが、花弁に見える部分はがく。乾燥して、ドライフラワーに利用できる。本州（中部以北）に生育するヤマハハコの変種で、西日本に分布する。

ノコンギク ***Aster microcephalus*** **(Miq.) Franch. et Sav. var. ovatus (Franch. et Sav.) Soejima et Mot.Ito**

コンギクは本種を改良 分枝して、先端に内側が黄色の筒状花、外側が淡青紫色の舌状花をつける。ヨメナに似ているが、5 ㎜ほどの長い冠毛があり、開花直後の花でも目立つので、判別しやすい。

ハガクレツリフネ ***Impatiens hypophylla*** **Makino**

花が帆掛け船のようで、葉の下で咲くことから。高さ 30 ～ 80 ㎝。７～１０月、花柄が伸びてぶら下がる。白～淡紅紫色で、濃紫色の脈状の紋がある。花から飛び出た距は曲がるだけで、渦状に巻き込まない。ツリフネソウ、キツリフネとハガクレツリフネの 3 種が日本には自生している。

ハリガネワラビ ***Thelypteris japonica*** **(Baker) Ching**

葉軸や葉柄が黒味を帯び、細長くて針金のように見えることから。個々の羽片が詰まってつき、一番下の羽片は下向きになり、ハの字形に見えるのが特徴。本州から九州に分布。低山から山地の二次林など、乾いた林床、林縁でしばしば群生する。

ヒナノウスツボ

花の中にある雄しべが雛人形に見え、花の形が穀物を餅などにするためにつく、壷形の臼のことのようであることから。７～１０月、赤褐色から緑色の小さな壷形の花を付ける。山地の林内の日陰、斜面の小さな沢沿いなど、やや湿った所を好む。

イヌタデ ***Persicaria longiseta*** **(Bruijn) Kitag.**

料理に使われるヤナギタデに対し、葉に辛味がなく、役に立たないため。花は6～11月に次々と咲き、果実は茶色にならずに落下する。赤まんまとも呼ばれ、子供のままごとの材料にされることが多い。北海道から九州に分布し、田畑の周辺、原野、道ばた、原野、庭先など、いたるところに生えている。

イヌトウバナ ***Clinopodium micranthum*** **(Regel) H.Hara**

トウバナに似ているが、違うものである。トウバナは、花のつき方が塔のように段々と付くことから。葉は長さ 2 ～ 3ｃｍの卵形で、裏面には腺点が目立つ。8 ～ 10 月に薄紫色の花が咲き、がくには開出する毛が目立つ。北海道から九州に分布。林縁、谷、山道沿いなどの半日陰で、やや湿った場所に生育している。

ウツボグサ ***Prunella vulgaris*** **L. subsp.** ***asiatica*** **(Nakai) H.Hara**

花の形が矢を収める靫（うつぼ）という道具に似ていることから。夏に花の部分が枯れたように褐色となるため、夏枯草と言われ、生薬として、利尿や消炎に用いられる。地表に走出枝を伸ばして広がる。東アジアの寒帯から温帯にかけて広く分布。山野、日当たりのよい山野の草地、あぜ道に多く自生する。

ウワバミソウ ***Elatostema japonicum*** **Wedd. var.** ***majus*** **(Maxim.)H.Nakai et H.Ohashi**

ウワバミ（大蛇）が出そうな谷や渓流沿い、山地の斜面、崖地などの湿った場所に生育するため、名付けられた。茎は赤みを帯びた多肉質で、斜めに立ち上がるが、根茎は短く横にはってふえるため、群生する。若芽や若葉はミズやミズナと呼ばれ、山菜として人気が高い。若い茎をすり下ろすと粘液が出るので、とろろご飯もできる。

エイザンスミレ ***Viola eizanensis*** **(Makino) Makino**

比叡山で発見されたスミレ。スミレは大工用具「墨入れ」に由来し、花の後ろにある距（きょ）を墨入れに見立てたことから。葉は子葉の集まりのように見えるが、葉柄から伸びた 1 枚の葉である。4 ～ 5 月、淡赤紫色～白色の芳香がある大きめの花を咲かせる。本州から九州の、山地の林内や林縁の日当たりのよい場所に生える。

オトコエシ ***Patrinia villosa*** **(Thunb.) Juss.**

女性にたとえたオミナエシに対し、全草に毛があり、茎も太く壮大なことから、男性に例えた。8 ～ 10 月、分枝した茎先に、白い粟粒状の小花を多数つける。北海道から九州、沖縄の山地の林内、林縁に自生する。全草、根茎を天日で乾燥したものを、生薬名・敗醤（はいしょう）といい、醤油の腐ったような臭いがすることから。

カラスノゴマ ***Corchoropsis tomentosa*** **(Thunb.) Makino**

種子の色や形がゴマ (胡麻) に似ているが、役に立たないことから。イヌ…と付くものと同じ考えだろう。高さ 40ｃｍで、全体に細かい星状毛が生えている。8 ～ 10 月に黄色い花を下向きに咲かせ、中心部に 5 本の突出したものは雌しべではなく、やくを持たない仮雄ずいで、雄しべはその下部に 10 ～ 15 本付く。関東以西の本州～九州に分布。

キッコウハグマ ***Ainsliaea apiculata*** **Sch.Bip.**

葉の形が亀の甲羅（亀甲）のようで、花の形が白熊（はぐま）と呼ばれるヤクの尾の白毛に似ていることから。白熊（ハグマ）を束ねてハタキのようにした仏具を払子（ほっす）という。高さ 10～30㎝。葉は五角形または 5 つに浅く裂け、茎の下に集まってつく。花は白色で 3 個の小さな花が、先は 5 つに深く裂ける。北海道から九州に分布し、山地のやや乾いた木陰に生える。

ツルシキミ ***Skimmia japonica*** **Thunb. var.** ***intermedia*** **Komatsu f.** ***repens*** **(Nakai) Ohwi**

シキミに葉が似ていて、枝が地面を這い、つるのように見えることから。常緑小低木。雌雄異株。高さ 30 ～ 50 ㎝。花は 5 月、茎の先端に白色～淡紅色を帯びる小花を咲かせる。秋に真っ赤に熟し、緑の葉とのコントラストが美しい。葉や実が有毒で食べられないが、手でもむと芳香がある。

ツルリンドウ ***Tripterospermum trinervium*** **(Thunb.) H.Ohashi et H.Nakai**

花がリンドウのようで、つる性であることから。他の物に絡みつき生長する。8 ～ 10 月、リンドウに似た淡紅紫色の花を咲かせ、秋～冬に紅紫色の液果となる。中国では全草を青魚胆草（セイギョタンソウ）と呼び、解熱・健胃・咳止めなどに用いる。日本では本種と、ハナヤマリンドウが屋久島にある。

ニリンソウ ***Anemone flaccida*** **F.Schmidt**

1 本の茎から 2 輪ずつ伸びることから。花は 3 ～ 6 月に、2ｃｍほどの白いがく片を持つ花を 1 ～ 4 輪つける。根茎は生薬名で地烏（ジウ）と呼ばれ、漢方薬として用いられる。若葉は山菜として食用となるが、有毒植物であるトリカブトの若葉に似ているので注意が必要。

ノキシノブ ***Lepisorus thunbergianus*** **(Kaulf.) Ching**

古い民家などの軒下に繁殖し、土が無くても堪え忍ぶという意味から。根茎は長く横に伸び、樹皮などにまといついて伸びる。胞子嚢群はやや大きな円形で包膜はなく、葉裏に並んでつく。生薬名で瓦韋（がい）と呼ばれ、利尿薬、むくみなどに利用される。

スギ ***Cryptomeria japonica*** **(L.f.) D.Don**

幹が真っ直ぐにすくすくと伸びるので、直木（すぐき）から。日本特産。樹齢7000年と推定される九州・屋久島の屋久杉（通称・縄文杉）や、羽後などに自生。ヒノキにくらべて古いタイプの植物で、風に乗せて花粉を媒介する風媒花で、花粉アレルギーの原因として問題となっている。濡れても腐りにくいことから、日本では多く植林されている。

スズシロソウ ***Arabis flagellosa*** **Miq.**

ダイコン（スズシロ）に似た白い花を咲かせることから。多年草。高さ 10 ～ 25 ㎝。花と同時に根元から横に伸びる枝を出し、広がって群落をつくる。本州（近畿以西）から九州、沖縄に分布。急な斜面や崖などに生育する。北アメリカ、ユーラシア大陸に原産し、約120 種あり、日本には 9 種自生している。

センブリ ***Swertia japonica*** **(Schult.) Makino**

千回振出し（煎じ）ても、まだ苦味が残っているということから。強い苦味があり、健胃薬として利用されている。生薬名は当薬（とうやく）で、まさに薬を意味し、良く効くことを表している。9 ～ 11 月、枝先に白地に紫色の筋のある花をつける。北海道から九州、朝鮮、中国に分布し、日当たりの良い山野、粘土質の痩せ地などに生える。

タケニグサ ***Scrophularia*** ***Macleaya cordata*** **(Miq.) Makino**

タケと一緒に煮ると、タケが柔らかくなることから。または茎が中空で、タケに似る草の意味。多年草。高さ 1 ～ 2m に達する。葉は卵形で掌状の切れ込みがあり、キクの葉に似ている。茎を切ると黄色の乳液が出る。民間療法で外用にされるが、炎症を起こす場合がある。欧米では観賞用に栽培される。

キヅタ ***Hedera rhombea*** **(Miq.) Bean**

木のように茎がかたくなり、茎の各所から根（気根）を出して、木や岩に絡みつく姿から、木の蔦を意味する。観葉植物のアイビー（ヘデラ）の原種で、冬にも葉があることから、フユヅタ（冬蔦）とも言われる。葉は多様で、3 角形～ひし形卵形。耐陰性が高く、乾燥にも強いため、道路の分離帯の植え込みの地被、壁面の緑化、室内の緑化などに利用されている。

ギョウジャアザミ ***Cirsium gyojanum*** **Kitam.**

山岳信仰の地で大台ヶ原の山道に生えていたことから。多年草。高さ 1 m。根元から出る葉は花が咲くときには枯れず、茎には毛がある。葉には長さ 3 ～ 12 ㎜の鋭い刺がある。8 ～ 11 月、白～淡桃色の花は下向きに咲く。北海道から九州に分布し、山地のやや乾いた木陰に生える。

ギンバイソウ ***Deinanthe bifida*** **Maxim.**

花の形を白い盃に例えた。多年草。高さ 70cm。葉の先が 2 つに裂けるのが特徴。7 ～ 8 月に、茎の先に球状の包につつまれた状態でつぼみができ、淡紅色の 2 ～ 3 枚のがく片をもつ装飾花と、白い 5 弁の梅花状の両性花を咲かせる。本州 (関東地方以西) から九州に分布。林縁や谷沿いの日陰の多い所に自生する。

ヤマアジサイ ***Hydrangea serrata*** **(Thunb.) Ser. Var. Serrata**

山地に生育するアジサイの意味。ガクアジサイと呼ばれることがあるが、全体が繊細なため区別する。 6 ～ 8 月に枝先に小さな花を咲かせる。色は白や薄紅、青など豊富。花のように見えるのはがくで、真ん中に小さな両生花がある。風情のある姿が好まれ、庭植えや盆栽などにされる。

クサヤツデ ***Ainsliaea uniflora* Sch.Bip.**

ヤツデに葉が似ている草という意味。多年草。高さ 10 ～ 30 ㎝。9 ～ 10 月、リボン状に花弁の裂片が巻き、黒紫色の花を咲かせる。11 月頃になると自家受粉することが多い。北海道から九州に分布し、山地の渓流沿いの林下、林縁、やや乾いた木陰に生える。かっては広く分布していたが、環境条件の変化などによって、現在では限られた狭い地域にのみ自生している。

コクサギ ***Orixa japonica* Thunb.**

小さな臭い木、小型のクサギのことだが、クサギはクマツヅラ科でまったく縁もゆかりもない。葉にミカン科特有の油点があり、独特の臭気がある。葉が 2 枚ずつ対に出る形を、コクサギ型と表現する。山野の林下や渓谷など、石灰岩地域の谷に多い。茎葉を煎じた汁は殺虫効果があり、民間薬としても使われ、生薬名は和常山（わじょうざん）。オナガアゲハ、カラスアゲハの食草。

シシガシラ ***Blechnum niponicum* (Kunze) Makino**

葉が四方に広がるさまを、獅子のたてがみに例えた。太い根茎があり、葉を放射状に地面近くに広げ、 5 月の終わり頃から、栄養葉と胞子葉を形成する。栄養葉は 1 回（単）羽状複葉、表面に浅い溝があり、裏面ではかるく隆起する。胞子葉は栄養葉よりも高く立ち、最初赤色を帯びて直立する。日本固有種。

ジャノヒゲ ***Ophiopogon japonicus* (Thunb.) Ker Gawl.**

細い葉を蛇のヒゲに見立てた。別名・リュウノヒゲ（竜の髭）。果実は 12 月に丸くつやのある濃灰青色に成熟する。ハズミ玉といい、昔は女の子の遊びに用いられた。根の紡錘状に膨れた部分を生薬・バクモンドウ（麦門冬）として用いる。園芸上では地被植物として使われ、小道の境界や広く地面を覆うように植栽される。

ジュウモンジシダ ***Polystichum tripteron* (Kunze) C.Presl**

シダ植物。葉の形が十文字槍を連想させることから。オシダ科の他の種類にはおなじようなものがなく、非常に解りやすいシダである。別名・シュモクシダは、鐘をたたくＴ字形の棒である撞木（しゅもく）から。頂羽片は長さ 20 ～ 50cm になり、胞子嚢群（ソーラス）は小さい点状で、苞膜は円形で早くに落ちてしまう。

ショウジョウバカマ ***Helonia sbreviscapa* (Maxim.) N.Tanaka**

花を中国の想像上の動物である猩猩（しょうじょう）の赤い頭に、ロゼット状の葉を袴（はかま）にたとえた。猩々はオランウータン（ショウジョウ科のほ乳動物）とも。根生葉が地表面に広がり、ロゼットを形成する。3 ～ 5 月に濃紫色～淡紅色の花を咲かせ、がくが長く残るので、自生地を確認しやすい。県内にはシロバナショウジョウバカマがある。

シラキ ***Neoshirakia japonica* (Siebold et Zucc.) Esser**

材や樹皮が白く、傷をつけると白い乳液を出すことから。秋に紅葉する。5 ～ 7 月黄色い花を咲かせ、10 ～ 11 月に果実が灰褐色に熟す。種子は 7mm ほどの球形で、約 50%は油分を含んでいる。街路樹に利用されるナンキンハゼの仲間で、別名をアブラギリといい、種子を絞り油を採集し、食用や灯火用、塗料、整髪料に利用したことから。本州から九州に分布し、山地の湿潤な斜面に多い。

スイカズラ ***Lonicera japonica* Thunb.**

つる性の植物で、花の付け根部分に蜜あって、摘み取って吸ったことから。冬でも葉が落葉せずに残っている様子から忍冬(にんどう)、花の色が白から、だんだん黄色に変化していくため、金銀花（きんぎんか）ともいう。漢方では花を乾燥させたものをキンギンカ (金銀花)、葉を乾燥させたものをニンドウ (忍冬) といい、お茶にして飲む。